

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：34313

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02276

研究課題名（和文）ヘーゲル弁証法からみたデューイ探究理論の再評価とその現代的意義に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Reevaluation of Dewey's Theory of Inquiry from the Perspective of Hegelian Dialectics and its Contemporary Significance

研究代表者

松下 晴彦（Matsushita, Haruhiko）

花園大学・文学部・教授

研究者番号：10199789

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、ヘーゲル弁証法の見地からデューイの探究理論を再評価し、その現代的な意義を改めて確認することにあつた。これまで、初期のデューイ思想がヘーゲル哲学の強い影響下にあつたこと、中期の実験主義や経験主義はヘーゲル的な全体観念論の超克としてあつたことは共有された見解であつたが、本研究では、（精神と身体、行為と知識、権威と自由などの）二元論批判に加えて、「成長としての教育」や「経験の連続と再構成」などの主要概念の着想やその枠組み、さらには晩年の探究理論におけるその特異な論理思想においても、ヘーゲル弁証法の痕跡をみることができると確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の目標は、デューイ思想をヘーゲル弁証法の観点から再評価することにより、実践的に多義的だといわれてきたデューイの主要な教育概念をより理解可能なものとして提示することにあつた。教育政策の主要な概念は、探究的な学びや協働性、反省的思考などデューイ思想に淵源を求められることができる語彙で構成されているが、デューイ哲学の形成におけるヘーゲルの弁証法的な問題の立て方と思考法の影響を再評価することによって、帰結としてのデューイ哲学ではなく、デューイの経験主義にヘーゲル的な全体論的な解釈を施し、有機体としての学習者、外部を排した探究概念など、より根源的で包括的な観点と理解の仕方を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：The theme of this research was to reevaluate Dewey's theory of inquiry from the perspective of Hegelian dialectics and reaffirm its contemporary significance. It has been a shared view that Dewey's early thought was strongly influenced by Hegel's philosophy, and that experimentalism and empiricism of the middle period of his research were intended to transcend Hegelian absolute idealism. In this study, we confirmed that "the deposit" of the Hegelian dialectic can be found in Dewey's criticisms of dualism, key concepts such as "education as growth" and "continuity and reconstruction of experience," as well as in the unique logical thought found in the theories of inquiry of his later years.

研究分野：教育哲学 教育思想

キーワード：デューイ ヘーゲル 弁証法

1. 研究開始当初の背景

デューイの教育思想の形成に関する研究は、国の内外において、既に多くの蓄積がある。その一般的な特徴は、先ず1) デューイ思想の形成を、観念論期、実験主義期、自然主義期に区分し、最初の観念論期は、ヘーゲル主義の立場にはじまり、後に克服され、離脱されたと捉え、次に2) デューイの教育学説は、シカゴ大学の実験学校での実践を背景に、心理学的機能主義、プラグマティズム、道具主義の結実として、実験主義期に形成されたとし、そして最後に3) コロンビア大学時代の实在論との対決のなかで晩年の自然主義的経験論が確立されたというものである。

こうした定説ともいえる一般的な解釈に対して、近年米国やドイツにおいて、「新ヘーゲル主義からのデューイの離脱や、W. ジェイムズや C. S. パースからの強い影響を否定するものではないが、ヘーゲル哲学自体のデューイ思想への影響は、生涯にわたるものであった」という解釈が徐々にではあるが、提示され始めた。その主なものは、J. R. Shook の *Dewey's Empirical Theory of Knowledge and Reality* (2000)、T. C. Dalton の *Becoming John Dewey* (2002)、J. A. Good の *A Search for Unity in Diversity* (2006)。また学術論文や学会発表論文であるが、J. Garrison, による “The Permanent Deposit of Hegelian Thought in Dewey's Theory of Inquiry” (2006)、D. Barker, の “Between Reconciliation and Democracy: Hegelian Themes in Dewey's Philosophy” (2010) などである。

これらの研究の論拠となっているのが、近年、新たに編纂され公開され始めた、ミシガン大学時代およびシカゴ大学時代(一部コロンビア大学時代)のデューイによるヘーゲル哲学に関するセミナーと講義ノートである。デューイは、講義やセミナーを実施する際、今日の TA に相当する学生に速記録をさせたことがあり、また聴講学生や一般学生が雇用した速記録者による記録が現存している(デューイ自身の講義ノートは現存していない)。新たに入手可能となった資料は、少なくとも 1896 年から 1900 年まで、デューイが依然ヘーゲルに強い関心を寄せていたことを示唆するものであり、従来の一般的な解釈と定説「1890 年以降、ヘーゲル哲学との決別があった」を覆す可能性がある。

本研究では、この仮説をもとに、デューイ哲学の生成に、ヘーゲル弁証法の痕跡を問うことにより、またより具体的な作業仮説としては、ヘーゲル的な諸概念(個別、特殊、普遍のモーメント、概念形成など)がどのように変換されたかを分析し、確認することにより、デューイ哲学の集大成である探究理論の主要概念(反省的思考、推理と含意の二重操作など)と枠組みを明示的で、理解しやすいもの、より実践的なものとして提示することを企画した。

したがって、本研究課題の中心となる問いは、従来の解釈—デューイがヘーゲル的な絶対的観念論、弁証法的な形而上学から離脱したという解釈—に対し、ヘーゲルの影響は、デューイの生涯にわたっており、逆に、彼の実験主義や自然主義的な経験論、その集大成である探究の理論は、ヘーゲル的な弁証法からみたときに最もよく理解できるのではないかというものであった。

2. 研究の目的

本研究課題は「ヘーゲル弁証法からみたデューイ探究理論の再評価とその現代的意義に関する研究」であるが、本研究の目的は、上記に示したように、昨今のプラグマティズム再評価の思潮において、新たに編集が開始された、ミシガン大学・シカゴ大学時代のデューイによる未公開の「講義ノート」および南イリノイ大学のモリス・ライブラリーにて発見されたデューイによる草稿の分析をもとに、第一に、デューイの探究理論の形成過程におけるヘーゲル弁証法の影響について再評価し、デューイ哲学の諸概念と枠組みの淵源と生成、展開をヘーゲル哲学との関連で明らかにすること、第二に、デューイ探究理論および教育哲学の主要概念、「成長としての教育」「生の様式としての民主主義」「経験の連続と再構成」「探究(問題解決)能力の育成」などをヘーゲル弁証法の観点から再考することにより、曖昧で難解、実践的でないとされてきたデューイ思想の、より説得的で整合的な理解の仕方を提示することにあつた。

3. 研究の方法

本研究課題の遂行にあたり、次のような視点(課題)を念頭においた。すなわち1) デューイに影響を与えたヘーゲル哲学、ヘーゲルの弁証法とはどのようなものか、どのような考えか、2) デューイはこれらをどのように受容し、変換しようとしたのか、3) ヘーゲル哲学からの「離脱」の真に意味するところはなにか、4) デューイ哲学全体に「ヘーゲル的残滓」はどのように確認できるかといった諸点である。

1) については、19 世紀中葉の米国のセントルイス学派、新ヘーゲル主義的文化運動の分析が中心となった。特に H. S. ハリスや D. デイヴィッドソンらによる *Journal of Speculative Philosophy* 他に掲載された諸論文の検討であった。他方、ヘーゲル哲学そのものの再評価も近年盛んであり、ヘーゲルの講義ノートの分析とその研究動向にも注視した。2) については、本研究課題の中心となる未公開のデューイのセミナー、講義ノートの収集と分析であった。これらの資料を有する重要な機関は The Joseph Ratner Papers and Collection of John Dewey, Morris Library, Southern Illinois University, また The Bentley Historical Library, The

University of Michiganである。特に前者は、紛失のため発行されなかったデューイの晩年の著作の草稿の一部が大量に発見され、最近Unmodern Philosophy and Modern Philosophyとして公刊されたという経緯もあり、資料収集の目的において、本研究にとっては重要な探索の拠点となった。また特に本研究の重要な第一次資料は“Hegel’s Logic” 1896 lecture notes, “Hegel’s Philosophy of Spirit, 1897 Lectures by John Dewey,” “Lectures Notes on Theory of Logic, 1: Autumn Quarter, 1899-1900”などであった。ミシガン大学とシカゴ大学時代のセミナーと講義ノートとを精査することにより、実験主義期におけるヘーゲル哲学に対するデューイの解釈と受容について検討を行なった。この時期は、デューイが精神を、有機体と環境との相互作用によって生まれる客観的意識と捉え、さらに有機体が環境に働きかける時の知性に注目し始めた時期である。環境に適応する能動的な個人という捉え方と、ヘーゲル的な「絶対精神」（合理的に再構成された世界の実現）とを比較し、またデューイが使用していたヘーゲルのテキストを特定化し、それとの照合も合わせて行い、実験主義確立期におけるデューイ思想形成の新たな解釈を提示することを心掛けた。3)と4)については、デューイの講義ノートを論拠とする最新の研究をレビューし、「ヘーゲルからの離脱」を果たしたといわれてきた1903年以降のデューイの「ヘーゲル的な残滓」について考察した。特に、ヘーゲルの「判断形成」とデューイ探究理論（論理学）の相似性、ヘーゲルの弁証法とデューイの実験概念、普遍・特殊・個別命題の峻別、さらにヘーゲル哲学の継承としての自然主義的な哲学的方法などについて明らかにすることを心掛けた。

4. 研究成果

上記のように本研究の目的は、第一に、近年新たに編集と公刊が開始されたジョン・デューイのミシガン大学、シカゴ大学、コロンビア大学時代の講義ノート、講義録、またその他の未完のデューイによる草稿の分析をもとに、デューイ思想の形成過程におけるヘーゲル哲学の影響と痕跡、特にヘーゲルの弁証法的な思考様式の影響を探り、また再評価することであり、第二に、この作業により、一般に理解されているデューイ思想の中心的な概念である探究理論のよりよい理解を目指すことにある。この研究作業には、第一に、講義ノート他の第一次資料の収集とその分析が不可欠であり、また第二に、同種の関心においてヘーゲル哲学のデューイ思想への影響について再評価を試みている先行研究のレビューと本研究との比較研究が不可欠であった。

第一については、サザンイリノイ大学のモリス・ライブラリーの好意により *The Joseph Ratner Papers and Collection of John Dewey* を、またミシガン大学のベントレー・ヒストリカル・ライブラリーの好意により *The Collection of John Dewey* の一部を閲覧し、デューイのミシガン大学時代とシカゴ大学時代の聴講生、速記録者による講義記録の一部、またデューイとアリス・チップマン夫人、J.アダムズとの未整理の書簡を閲覧することができた。特に講義記録については、シカゴ大学哲学部におけるヘーゲル哲学演習とコロンビア大学時代の論理学演習の授業に焦点化し分析を行なったが、その結果を概括すれば、デューイにとって研究上はヘーゲル哲学との決別があったとされる時期以降も、ヘーゲル哲学や論理学を継続して講義や演習において取りあげていたことが再確認された。第二については、*European Journal of Pragmatism and American Philosophy*, *Transactions of the Charles S. Peirce Society* 等の学術雑誌に掲載されている J.グッド、A.ライアン、J.ガリソン、L.ヒックマン等の関係書論文を分析し、本研究の主題の正当性と独自性についての確認を得ることができた。

この結果、次のような諸点が明らかとなった。まず、初期のデューイの思考方法の枠組みには、生物学者ハクスリーによる生物学的ダーウィニズムとヘーゲルの精神現象学と論理学の明らかな影響をみることができ、その痕跡は、後年の道具主義や実験主義、自然主義的経験主義というデューイ独自の哲学的立場の基底に存在し続けていることや、特にデューイ特有の問題の立て方、既存の哲学的課題を二項対立的図式に敢えて落とし込み弁証法的な止揚によって宥和と調停を提示することによりみることができ、さらに、これらの思考法は生涯にわたり継続していたと考えられる点である。次に、従来、デューイの中期における論理学思想は、ヘーゲル哲学との決別のあと C.S.パースに接近したことから、プラグマティズムとしての論理学へ発展したというのが一般的な見方であったが、本研究の分析によれば、パースとヘーゲル哲学との比較研究がにわかに脚光を浴びるようになったことも踏まえると、改めてデューイの思想形成における、ヘーゲル哲学とパースのプラグマティズム論理観との整合性やそれらについてのデューイ自身の解釈等について再度吟味する必要がある点である。最後に、デューイの最晩年の論理学、探究の理論における日常性と科学との連続性と包括的な捉え方のうちにヘーゲル的な弁証法的な枠組みの痕跡を見ることができると結論した。本研究の成果を概括すると、デューイ探究理論の形成は、ヘーゲル哲学の自然主義化した観念論とその方法によるものであったということになるが、こうしたいわゆる「ヘーゲル的な残滓」が、調停と宥和、融合の操作として、さらに他の特定の諸概念、有機体と環境の交互作用、方法と内容を分離しない独特な題材概念、社会的知性と習慣、民主主義的共同体の構築、個と社会の概念等にどのように実現しているのかといった問題についてはさらなる今後の検討課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 松下 晴彦 | 4. 巻 69(2) |
| 2. 論文標題 言語と思想の探究 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学） | 6. 最初と最後の頁 1 - 20 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 松下 晴彦 | 4. 巻 68(2) |
| 2. 論文標題 John Dewey 's Conception of Democracy as a Mode of Associated Living | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学） | 6. 最初と最後の頁 29-37 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/nueduca.68.2.29 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 松下 晴彦 | 4. 巻 67 |
| 2. 論文標題 デューイ「ヘーゲル講義」にみる自然化された精神哲学 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学） | 6. 最初と最後の頁 1-10 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 松下 晴彦 | 4. 巻 86 |
| 2. 論文標題 日本における翻訳実践の淵源をめぐる系譜学的考察 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 教育学研究 | 6. 最初と最後の頁 176-187 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 松下晴彦 | 4. 巻 65 |
| 2. 論文標題 20世紀初頭のアメリカにおける研究促進体制の形成とその役割 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』（教育科学） | 6. 最初と最後の頁 13-23 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|------------------|
| 1. 著者名 松下晴彦 | 4. 巻 63 |
| 2. 論文標題 苫野一徳「学問としての教育学」 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 日本デュイ学会紀要 | 6. 最初と最後の頁 99 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 松下晴彦 | 4. 巻 15 |
| 2. 論文標題 J.デュイの道徳教育論からみた「道徳の教科化」 | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 個性化教育研究 | 6. 最初と最後の頁 26 - 34 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件/うち国際学会 3件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 Matsushita, Haruhiko |
| 2. 発表標題 Democracy and Education in the Era of Social Transformation through Technological Innovation(2) |
| 3. 学会等名 International Symposium on Education in Mongolia (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Matsushita, Haruhiko |
| 2. 発表標題 Issues on training professionals for educational research and human development |
| 3. 学会等名 the International Conference on Quality Assurance in Higher Education at Mongolian National University of Education (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Matsushita, Haruhiko |
| 2. 発表標題 Democracy and Education in the Era of Social Transformation through Technological Innovation |
| 3. 学会等名 International Symposium on Education in Mongolia (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 松下 晴彦 |
| 2. 発表標題 20世紀初頭のアメリカにおける「社会の統計化」の展開とその意義 |
| 3. 学会等名 アメリカ教育学会第32回大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 松下晴彦 |
| 2. 発表標題 20世紀初頭のアメリカにおける研究推進体制の成立と社会科学の位置 |
| 3. 学会等名 アメリカ教育学会第30回大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計4件

| | |
|---------------------|-----------------|
| 1. 著者名 松下晴彦 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 名古屋大学出版会 | 5. 総ページ数 325 |
| 3. 書名 教育原理を組みなおす | |

| | |
|-------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 アメリカ教育学会編 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 東信堂 | 5. 総ページ数 307 |
| 3. 書名 現代アメリカ教育ハンドブック | |

| | |
|-----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 松下 晴彦他 (日本デューイ学会編) | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 勁草書房 | 5. 総ページ数 330 |
| 3. 書名 民主主義と教育の再創造 - デューイ研究の未来へ | |

| | |
|--------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 松下晴彦 安彦忠彦 豊田ひさき 佐藤学他 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 教育出版 | 5. 総ページ数 402 |
| 3. 書名 現代カリキュラム研究の動向と展望 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | | | |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|